◉巻末リポート

重年 十七夜祭り

能登町指定無形民俗文化財「重年十七夜祭り」が2月10日、重年集会所で行われた。太陽神である日宗屋神社の祭神に豊作を祈願する祈年祭。地域住民によって脈々と受け継がれる伝統神事をリポート。

【写真の説明】

① _「目出度しと」。無事に松が起きて豊作を喜び、参会者は「万歳楽土」と応じる。
② _ ワラ筒に串を刺してつり下げる田楽豆腐（現在は模型）は稲穂に見立てられる。
③ _ 祭壇には大きなカブが供えられ、料理もカブが中心。かつての大飢饉で日宗屋の神様が舳倉島（輪島市）に自生していたカブを持ってきて植えたところ、どんなにやせた土地でも5寸ほどの大ぶりになり、その年の飢えをしのいだと伝えられている。十七夜祭りは「かぶら祭り」として伝承されてきた。
④ _ 松祝いが始まるまで松は天井につるされている。この松は5階5心（枝が5段で段ごとの枝が5本）で、祝いものとして「蟹の爪」が結びつけられる。
⑤ _ 蟹（ガン）の子が枝に取り付いて、松を立てるのを妨害する。この地域には、その昔村人を襲った蟹を弘法大師が石に変えたという『蟹の甲（ガンノコ）伝説』が伝わっている。
⑥ _『から手水』。松祝いが始まる前に、全員がお盆に盛りつけた雪をなでて手を清める。
⑦ _ 祝儀歌や作業歌を歌いながら松の周囲を回る『田まわり』。
⑧ _ 今年の当番から来年の当番へ杯が渡される『当渡し』。

かつて1月17日の夜に行われていたという『重年十七夜祭り』。集会所には地域住民30人が集まり、午前11時から厳かに神事が進められた。神事の後の『直会（なおらい）』は、上座に座る区長や氏子総代と当親の問答が見もの。カブ、豆腐、甘酒、納豆汁など言い伝えられる献立に沿った縁起物の料理が並べられていた。

場が盛り上がったころ、総代の合図で『松祝い』が始まる。総代が稲穂に見立てた松を立てようとすると、松の枝に地域の子どもたちが取り付き、立てるのを妨害。子どもたちは、稲や田んぼに害を及ぼす蟹（ガン）の子とされる。「まめに田まわりせんと蟹の子が逃げんぞけぇ」との声を受け、「そんなら一つ、田まわりをしましょう」と、総代は祝儀歌を歌いながら松の周囲を回り、子どもたちを松から離した。

蟹の子が退散すると、ゆっくりと松を起こし「目出度（めでた）しと」と誇らしげに唱える。参会者は「万歳楽土」と応じ、今年の豊作を喜んだ。この日は5人が松祝いを披露。集会所には、地域の伝統を受け継ぐ人たちの笑顔があふれていた。